

N. S. Shukla (ed.):

The Buddhist Hybrid Sanskrit Dharmapada

田 端 哲 哉

一

Rāhula, Sāṃkītyāyana 師がチベットのエール僧院で発見し、インドへ將來した多くの写本は、徐々に研究成果が報告され、たとえは Tibetan Sanskrit Works Series (TSWS) として既刊十八冊を数える。しかし未だ多くの写真版の写本が Bihar Research Society (Patna) に保管されていると聞く。現在テラン大学教授のシュクラ氏は、このラーフラコレクション中より佛教混淆梵語の法句經 Buddhist Hybrid Sanskrit Dharmapada (BHS-Dhp.) に注目し、TSWS の十九冊目として一九七九年にパトナから校訂出版をされた。周知の如く、所謂「法句經」に関しては Dharmapada (Dhp.)、Gandhari Dharmapada (G-Dhp.)、Udanavarga (Udv.) の各テキストが既に出版されており、漢蔵訳の諸本も亦既に学者の研究対象となっている。このような折、学界に裨益すること量り知れぬ第四種類目の纏った該書が出版され、評者は驚きと慶びでもって先ず総

語索引の作成を開始した。通読した限りの印象と卑見をここに記す次第である。

シュクラ氏は、該書の公刊に当り、前述のラーフラコレクション中に埋れていた十一世紀頃と査定しうる写本——Palm leaf に各葉六行宛、東方原型ベンガリー文字で書写——を底本として使用された。全二章四一四偈からの構成をみるこの写本の第一葉には、チベット語で Dharmapada amṛtapada と記されており、所謂「法句經」の異本の一つであることを証明している。内容的には未知の八章——Atha, Soka, Kalyani, Sarana, Khanti, Asava, Vacā, Dadanir 但し最後の第二章はその varga 名が判明しない——と五九偈(?) が従来のも異本 Dhp., G-Dhp., Udv. に見られないという事実をも含み、誠に学術的興味の尽きぬテキストである。やむにシュクラ氏は BHS-Dhp. の相応偈を Dhp., G-Dhp., Udv. や他のパリー聖典中に求め、その報告を Parallels (Notes) として、かつ偈文の索引を巻末に付されている。Text と共にこれらの業績も高く評価され、既にこの種の詳細な調査結果を発表している J. Brough: G-Dhp., F. Bernhard: Udv. Bde II, 丹生実憲「法句經の対照研究」水野弘元「法句經の研究」等と併用することによって、「法句經」の原典研究は益々核心に迫りうる状況となった。

二

該書は聖典であり、熟読玩味すべき經典であるが、これを学術研究の対象として座右に置く時その校訂には少しく不満が残

らないでもない。シュクラ氏は写本の *śākhā* 等の文字が極めて不明瞭であり、言語面でも難解な点——*saṃpanno* と *saṃpanno* 或いは *nibhinṇate* と *nibbannate* とは同一語と看做すべきであるということなど——が散見しうる旨を吐露されて該書の校訂出版が決して容易でなかったことを言明している。しかし我々は *Text* を出版するに当り、一般的方法論の一根拠を提示し、検討しなければならぬ。それは写本を書写した人 (*scribe*) と校訂出版する編者 (*editor*) とが夫々写本に対して如何なる姿勢で臨んだかという点に関する我々読者の態度ともいえようか。スクライプも亦原写本ともいうべきか、底本となる聖典を手元に置いて書写したであろうし、或いはそうでなく暗誦した聖典を記した場合でも、我々は彼らの書写が常に完璧であるという認識誤謬を避けねばならない。写本の校正をエディターが如何に科学的学術的に推敲して行くかという事情は、幸なことに総てエディターに任ざれている現状である。斯学待望の重要典籍である故に、スクライプの書写通りエディターが公刊することの利点も認めねばならないが、該書に限っていえば、*saṃti* (413a) と *saṃti* (414a) のローマナイズの仕方、*dhammā* (113b, etc.) と *dhammā* (1a, etc.) とを統一すべきか否か、*anuprattāṃ* (48c) と *anuprattāṃ* (49c) とは同語を想起せしめる、などの諸問題があり、これらはスクライプに帰すべき責任というよりエディターが如何に自らの学術的見解をそこに表示するかという岐路点であろう。斯様な問題に関心を寄せらるるならば、該書はエディターがスクライプの書写を可成り重要

視し、自らの学術的な批判的方法論を表明した形跡が非常に少ないといえよう。勿論 Hybrid Sanskrit なる固有の梵語が在る訳ではなからず、Classical Skt. と対比して Hybrid Skt. と呼称すべき混淆梵語のあることは周知されよう。F. Edgerton は既に有名な BH Skt. Grammar, Dictionary を公刊しているが、それ故に Hybrid Skt. はこれらをもつて総てあるとは断言できない。一例を示せば、P. *anamatagga*, AMg. *anavattagga* に對し BH Skt. と Edgerton は *anavattagga* と認定しているが、我々は *anavattagga* なる BH Skt. を指摘しようのである (Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden Teil I. Wiesbaden, 1965, S. 95, K. Nr. 167 R-3-6: *anavattagrasamyukta*)。該書に見られる *mañḍeyā* (193a) と *manyeyā* (194a) は同一語を思わしめ、*drīṣṭā* (260a) と *-drīṣṭim* (31c), *duḍṣim* (237c), *nekkhammo* (244b) と *nekkhamma* (272a) など書写の相違、これらは余り重要な意味をなさないと看做しうるが、*sanvittāṃ* (45c) に至っては印刷上のミスか否か評者には確信が得られない。従って、出版されたテキストのローマナイズの正否を確認しうるよう、底本とした原写本の写真版を載せておく配慮が望まれた次第である。

他方、該書は韻文集の故に、韻律に関して、エディターの態度が問われてこよう。Dhp. 等と同様に BHS-Dhp. の偈文もその大部分が *śloka* である。時には *Pankti*, *Trisṭubh*, *Jagati* の用例も見受けられるが、韻律史的にこれらの種類は、Veda 以来の古い形体であるから、韻律の種類を根拠に偈文の歴史的

位置付けを決定することは困難である。しかし該書を韻律面より研究調査の対象とすることは可能であろう。六一c、dの二行の如く、*śloka* であるにもかかわらず母音が九個見られるのは、最初と二番目の母音を読誦者が一母音として誦すということ、或いは七三cの様に三番目の a (語尾) と四番目の a (語頭) は、書写する場合短母音二個となるが、読誦者は a と長母音一個で発声するという如き、読誦者の慣例を我々に喚起せしめる偈文が該書には少しく含まれている。さらに韻律面より偈文を批判的に取り扱うことも可能である。例えば *saddhannam* (185d) は韻律—*śloka*—の意味 (P. *saddhannam*, Skt. *saddhannam*) 上の二点より *saddhannam* でなければならぬ (*avekhanam* (258e) も同様に *avekhanam* が正しい) と考えられる。又、*damasam* (73d) は *damśanam* (69a, etc.) と解した方が *śloka* の規則に反することなく意味がよく通じるのである。韻律学に門外漢の評者には、所詮該書を韻律面より言及することが不可能であるけれども——例えば二四七偈を如何に解すべきか——専門家による該書の研究が鶴首される。

三

次に評者は該書を他の異本と比較対照する研究方法論について一つの問題提起をしてみたいと思う。それはシュクラ氏が BHS-Dhp. は Dhp. より古いと Introduction にて報告している点に関連する事柄である。氏が根本的な詳しい論証を記述していないため、評者にはこの説に対して賛否両論いずれとも決

定し難いのだが、ただ、氏の用いた方法論——章の分類や偈文の有無を BHS-Dhp. と Dhp. とにおいて比較対照する——のみで、両書の新旧を決定する結論が導きうるものかどうか疑問である。果してこの方法論で、聖典全体の成立に関する学術的根拠となりうるのであろうか。Dhp. や Udy. 或いは G-Dhp. と漢蔵訳異本間における比較検討においても、偈文の有無の事実だけをもって經典成立史の根拠とする仕方は謹むべきでなからうか。それは聖典の編纂者には、常に彼の所属部派の基本的思考が影響しており、その路線に従って聖典が編纂されていると考えられるからである (Vgl. E. Frauwallner: *Geschichte der indischen Philosophie*, S. 149)。従って異本間における偈文の有無の調査は、聖典の成立史的観点よりも所属部派に波及する論証根拠となる。所謂「法句経」は釈尊の金口に帰すべき偈文集といわれているが、*Veda*, *Upanisad* 以来の思想に全く影響を受けていないと明言することはできない。そこで教義史的には従来の思想と佛教との一線を画す如き、換言すれば佛教の獨創性 (Originalität) のあった時代と、次なる時代、即ち佛教教団内での各部派の個性 (Individualität) を強調した時代とを峻別しなければならぬ。故に、異本間における相応偈の有無を調査し、全体的比較をなす方法論は、聖典の成立史に関して余り肯定的な根拠とならないと思われる。新旧の決定については、全体的調査をする前段階として、個々の偈文の歴史的 position が先行しなければならぬと考えられる。Dhp. の中にも既に古い偈文——*Veda* 時代から佛教化への過渡期に説かれたと考えうる

もの——や少しく時代の下の部派佛教的要素、即ち佛教教団内での個性が明確になっている偈文などを僅かながら指摘しうる現状である。もし BHS-Dhp. が同一時代に作成され誦されていた偈文のみにて構成されていると看做すのであれば問題は無い。しかし今日この見解を何人が承認するであろうか。それ故に該書の偈文を個々に渡って逐一検討する仕方と、Pali, BHSkt. など言語面での考察、加えて教義史的な論究など多角的な論証が遂行されぬ限り、シネクラ氏説——BHS-Dhp. は Dhp. より古い——は我々に肯定的な心証を与えない。

四

聖典の成立史研究に用いる方法論と、所屬部派を確認する方法論とは酷似していても全同ではない。BHS-Dhp. の伝承部派は現在不明であるが、いずれ解明されることであろう。幸なことに、該書以外にも所謂「法句經」の資料は徐々に発見されているからである。その一例が斯学にて余り注目されなかった Udv. の註釈書である。これはごく少量の断簡であるがドイツより出版された Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden Teil 3. (Herausgegeben von E. Waldschmidt) Wiesbaden, 1971 S. 178-180. K. Nr. 922 及び 923 の Udv. II (Kamavarga) 7, 9 の重要な Kommentar である。しかし Udv. II, 7, 9 を我々は Dhp., BHS-Dhp. に見出しえない。却ってバリー聖典の SN, AN, Kv. 或いは G-Dhp. 等に相應偈を求めうる。従ってこの偈文は少なくとも説一切有部にあっては可成り

知られており、かつ重要な偈文として認識されていたことを想像しえよう。この点より BHS-Dhp. の編纂者は Udv. の編者と編纂意図の軌を一にしていることが明白となる。

さらに該書を中心として異本間における偈文の有無の相違を調査してみると、Dhp., G-Dhp., Udv. 中にたとえ一行でも相應する偈文を含めると二〇二偈(全体の約半数)、同様に Dhp., Udv. に相應する偈は一〇五偈、G-Dhp., Udv. に相應する偈は一六偈、Dhp. にのみ相應する偈は二三偈、Udv. にのみ相應する偈は五〇偈、Dhp., G-Dhp., Udv. を初め、他の現存バリー聖典中に見出しえない偈文二八を夫々数えうる。因に Dhp., G-Dhp. のみ、或いは G-Dhp. にのみ相應する BHS-Dhp. の偈文は皆無である。この調査より BHS-Dhp. が編纂成立した頃は、既に人々の口に馴染み深い偈文が沢山あったことを意味するといえよう。又、個々の偈文が各種のテキストにおいて如何なる章(varga)に撰せられたか、編纂者の意図が将来論究されるべきである。BHS-Dhp. 344 は Dhp. 182 と関連があり、G-Dhp., Udv. には見られない偈文である。しかし、BHS-Dhp. には dadanti の varga, Dhp. には buddhavarga に組み込まれている。他方 BHS-Dhp. 87 及び 270 には共に Udv. の yugavarga に見られるが、BHS-Dhp. には soka, asava の二章に別れている。従ってこの一瞥からしても偈文と章は本来固定的に不離の關係にあったとは考え難い。この様に編纂者の意図を探ることは、その聖典の所屬部派を解明することに連続して行くのである。これらの諸点を整理すると、現型の所謂「法

句經」が成立したのは、少なくとも原始佛教時代において偈文

が読誦されていた頃より時代は下るといふことが明白である。

恐らく古来より読誦傳承されて来た偈文や新たに口誦された偈文が、後に各部派の編纂者の手で纏められて一つの聖典となり成立したのではなからうか。

五

同様に Dh̄p. と Udv. との比較対照における言語面への言及も留意を要す。その顯著な例を次に一瞥してみよう。即ちマイン

ンの斯学界で指摘されたマール語の m. n. sg. abl. じ-an-なる古形語尾が認められるという説に關しては、¹⁾「*じ*」は L.

Alsdorf 博士の所説 (The Vasudevahīndī, a Specimen of Archaic

Jaina-Mahārāṣṭrī—BSOS, London, 1935-37, Vol. VIII, pp. 329-

331) 及び H. Lüders, E. Waldschmidt: Beobachtungen über

die Sprache des buddhistischen Urkanons, Berlin, 1954 §

189-§ 191 にも引用、承認されてゐる。なお、最近では中村元

博士が「ブッダの真理のことは感興のことは」(岩波文庫三三—

三〇二—、一九七八年、八三頁以下) の説に同意された。一方

K. De. Vreese 氏 BSOAS XXV/1, 1962 pp. 370-372 に於

て Alsdorf 博士の説に対し動詞の格支配²⁾ sloka の規則の二点に

つり反論を試みたが、その後の反響を評者は知らなむ。

つて斯学における世界的泰斗の諸博士に対し厚顔無恥、僭越

非礼であるが、評者は Alsdorf 博士の説に疑念を抱くつゝ、

博士は Saṅghadasaganīn 〇 Vasudevahīndī を調査された結

果³⁾ maraṇam (6, 13), kandaram (146, 29), āyaram (227, 24)

〇-an じ終⁴⁾ abl. じ確証⁵⁾ Dh̄p. 〇 pupphan̄ (49), jayam

(201), dukkatam (314) 〇三用例も終⁶⁾同様に abl. と論証され

たのである。しかし Dh̄p. に関する博士の論証の仕方は、Dh̄p.

と Udv. との偈文の比較によるものである。そこで該書(BHS-

Dh̄p.) を併用し、⁷⁾ 全むを再検討しよう。

1) Dh̄p. 49: pupphan̄ = Udv. XVIII, 8: puspād = BHS-

Dh̄p. 127: puspā

2) Dh̄p. 201: jayam = Udv. XXX, 1: jayād = BHS-Dh̄p.

81: jayam

3) Dh̄p. 314: dukkatam = Udv. XXIX, 41: kukṛtāc =

BHS-Dh̄p. 100: dukkatam

4) 中村元博士は前掲書にて「マイン語の『マインマ』四九の

pupphan̄ じ puspād の意味は、『マインマ』の詩句⁸⁾

マール語以前の言語(マカダ語の影響を受けてつた——)から

マール語に翻訳されるべきだ、マール語以前の古形がその中に

入り込んでしまったのである」と述べられて、「アルヌマドルン

教授の研究によつて判明した」ことを併記されてゐる。そこで

評者は次の二例を追加しよう。

1) Dh̄p. 54: candanam̄ tagaram̄ = Udv. VI, 16: tagarāc

candanād = BHS-Dh̄p. 121: candanam̄ tagaram̄

2) Dh̄p. 55: candanam̄ tagaram̄ = Udv. VI, 17: tagarāc

candanāc = BHS-Dh̄p. 122: candanam̄ tagaram̄

Alsdorf 博士の謂⁹⁾ Dh̄p. じ Udv. 〇比較¹⁰⁾ Dh̄p.

の偈文の語尾が -am の箇所を Udv. では -at としている点の指摘である。従って Dh.p. 54, 55 の二例は、博士の所説に従う限り m. n. sg. abl. と解ちねばならぬ。

詳論は別の機会に譲るとして、評者は次の諸点より、以上の五例は m. n. sg. acc. と考へる。(1) 所謂「法句経」の異本の言語面におきて、P. は Skt. よりも古く、というのが定説である(前田恵学博士「原始佛教聖典の成立史研究」七〇九頁、中村元博士「原始佛教聖典成立史研究の基準について」日本佛教学会年報二一七五頁)。(2) Dh.p. 314 では dukkatam を支配する動詞が無。(3) Alsdorf 博士の用いられた Skt. は Pischel ed. の Tib. Udv. 47 の還元梵語である。(因に Dh.p. 314. c sukatah は Bernhard ed. Udv. XXIX. 42 での sukatan となつてゐる)。(4) 水野弘元博士の理解(ペーリ語彙典三三四頁 seyya の項)は Dh.p. 314 に充当する。(5) 従来如何なるペーリ語文法書にも -am が m. n. sg. abl. と言及されていない。(6) 一に関連することであるが、Dhp. (P.) と Udv. (Skt.) の偈文比較において語の格変化を決定する仕方に疑問がある。などの理由によつて、評者は従来如く -am を m. n. sg. acc. と認定する者である。特に(6)は該書(BHS-Dhp.)にも影響することである。即ち Dh.p. の編纂者は -am なる語尾を用いて acc. で偈文を理解し、Udv. の編纂者は、同じ偈文を abl. で解釈し直したと看做しえぬものではないか。中村元博士は前掲岩波文

庫七三四頁、Dhp. 7 の訳註にて、異本間における理解の相違を指摘されているし、前掲論文では、「法句経」に関する限り俗語からサンスクリットに書き変えられた時、読者に親しみ易い表現に改められている例を指摘されている(前田恵学博士前掲書七四五頁)のである。異本間における偈文全体や語形の比較を通して文法にまで言及することの是非を評者は論じえないが、少なくとも Dh.p. の方が Udv. より古いと認められている場合、Skt. を基準に P. の語形を論ずることに矛盾を感じる次第である。ただ理解の相違を承認するならば、BHS-Dhp. には Udv. とは異なり、Dhp. の編纂者と近似した根拠に基づいて偈文を解釈した痕跡が見受けられるのである。

該書の言語は Hybrid Sanskrit とはいえペーリ語に大変近い梵語であるから、殊にミスプリントは避けられねばならないテキスト中に百箇以上のミスプリントを数える該書は、学術的価値を低減させることにもなりかねない故に、近時改訂出版が望まれよう。

しかし該書は単に「法句経」研究に留まらず、あらゆる分野の印度学研究者に尽きせぬ興味と恩恵を与えてくれるテキストである。この偉業に感謝し、功績を讃えたい。

(TSWS, No. 19, K. P. Jayaswal Research Institute, Patna, 1979
15.4x23.9cm pp. viii+90, Rs. 16.)